

ホスピタルアート

病棟に癒やし 大崎の精神科病院「気軽に受診きっかけに」 宮城

毎日新聞 2016年9月5日 地方版

宮城県 >

芸術・文化 >

カルチャー >



病棟の壁に描かれた絵を紹介する菅野院長
= 大崎市古川西館3で

[PR]

大崎市古川の精神科病院「こころのホスピタル・古川グリーンヒルズ」（菅野庸院長）の病棟を絵で彩るホスピタルアートが注目を集めている。同病院は東日本大震災で建物の一部が損壊する被害を受け、6月に新築した病棟にホスピタルアートを取り入れた。菅野院長は「精神科を気軽に受診してもらうきっかけになれば」と話す。【本橋敦子】

同アートは、仙台市の仮設住宅などで、芸術活動で被災者を支援している一般社団法人「MMIX Lab」（ミミックスラボ）の村上タカシ代表が監修。5階建ての病棟をフロアごとに5人のアーティストが担当し、コンセプトの異なる絵やデザインが楽しめる。

同院は県内外から1日平均約60人の外来患者が受診。10～90代の約210人が入院しており、中には沿岸部で津波被害に遭った影響でうつ病を発症、仮設住宅の生活に耐えられずに同院で生活する患者もいるという。

病棟の壁やドアに施されたアートには、仙台市地下鉄や八木山動物公園（同市太白区）をモチーフにした作品や、県内各地の特産物を表現した絵などがあり、地元を思い出せる工夫も。無口だった患者が絵を見て話すようになった事例があるといい、菅野院長は「仮設に住む人たちの心をケアしてきたアートが、精神科の患者さんを癒やしている」と手応えを語る。

今後、閉鎖された仮設住宅で使われている壁画デザインを取り入れることも検討しているという。菅野院長は「病院らしくない精神科病院を目指しつつ、ホスピタルアートで復興の思いを引き継いでいきたい」と話している。